

言語基礎論試論

—— 特に言語と意識との関連の観点から ——

池田昌昭*

An Inquiry into the Foundation of Language

—— In Particular from the Point of View of the Relation between Language and Consciousness ——

Masaaki Ikeda *

Received September 11, 1996

[キーワード] : 言語, 意識, 感覚器官, 弁証法, 論理実証主義

1. はじめに言語とは

言語とは一体何であろうか？

言語は人間生活において缺くことのできないものである。なぜ缺くことができないのか？それは言語が人間生活において、人間相互のコミュニケーションを成立させているからなのである。言語がなければ人間は何でコミュニケーションをはかるのか。たぶん身振り手振りであらわす以外はないのである。文字を知らず、音声で言語を発声することができなければ、あとは身振り手振りしかないのである。この意味で言語は人間生活にとってコミュニケーション手段として最も重要なものなのである。たとえば動物は音声を発するが、それは危険を知らせたりする意味があるのだろうが、人類言語に比較すれば極く極く初期の形の音声であり、それは言語とは言えないものである。

言語には文字で表される文字言語と、音声で表される音声言語の二種類がある。コミュニケーションの手段としての文字言語と音声言語とがいずれが先に発生したのかは、いまとなっては想像するしかないが、おそらくそれは同時並行の形で発達したのであろう。すなわち、たとえば現実の「木」という物体がまず存在する。この木に対して最初はどうしていたか。まず「アレ」とか「ソレ」と言って指を指していた。しかしアレとかソレとか言うものが徐々に多くなるにつれ周りのものを識別しなければならなくなった。しかも「木」に対してその形から象形文字が発明され、と同時にそれは「キ」という発音であるということが同時進行したものと考えられるのである。木の形を見て、地面に木という文字を木の枝で書いた。それと同時に、

* 国際交流センター
International Exchange Center

木という文字を書きながら「キ」という発音が形作られていったのではないか。地面に木の絵を書き、「キ」と発音していったのである。

2. 言語とは実践的な意識

言語形成の原初は、猿に近い初期人類が人類としての道を歩み始めた頃に遡ることができる。すなわち言語は初期人類の協働労働のなかの生活上の必要性から発生した。労働のなかから、協働労働のなかのコミュニケーションの必要性から言語が発生したのである。労働が言語を生み出し、その生み出された言語は再び人間に戻り人間の意識を明確化させていった。一つの概念を言語で伝えようとするとき、まず概念の形成が初期人類の脳活動において形成されていった。

「ソノ棒ヲトツテ」という概念を形成する際、まず何が形成されるのか。まず「棒」の概念である。棒を眼前に見て、その物体にたいして「棒」という発音を充て「棒」だと同定概念形成作用がまず必要となる。棒を眼前に見て、「コレハ棒デアル」とまず視覚神経からの伝達により、脳の認識領野が認識する必要がある。眼前に棒を見て、その認識の意識が働かなければ問題となり得ない。眼前に棒があるということを脳が「それは棒」と概念形成することが第一。

次にその棒にたいして「棒」という言語を付与することが集団間のコミュニケーションのなかで発生する。棒を指し「ボウ」と発音し、棒であるという共通認識を集団構成員で形成するためである。つまり棒にたいして「ボウ」という概念を形成し、その概念に「ボウ」という言語を付与する言語活動が始まるのである。ここにおいて外界対象物と人間意識との相互関係が言語を媒介として開始されるのである。

外界事物もしくは外界対象物はまず人間の感覚器官の働きにより知覚される。棒であれば、棒の形を認識し、形やその大きさ、重さや材質を視覚、触覚により知覚する。擦れば少し音が出ることを聴覚が知覚する。知覚された棒により、人間の脳細胞活動は、その棒がなにか役立つものか、ふりまわせば動物を捕獲できるとか、先を尖らせば動物を殺傷できるとかの思考を展開する。この思考形成開始が人間の人間たるゆえんなのである。

それはいつに日常生活のなかから特に労働と生命維持活動——すなわち初期人類にあっては狩猟・採集——のなかから発生するものなのである。そしてこの思考形成の一環として「ボウ」と言い表す言語が思考形成のなかで形づくられるのである。この意味で言語の創造は、自然界にたいする人間の主体的働きかけの典型であり、これがのちに敷衍化され、人間と人間とのコミュニケーションに言語が応用されていったのである。

すなわち言語は、人間の対自然、対人間関係のなかで発生したのである。従って「言語の発明は、人間にとっては彼が人間と同じ位自然なこと」⁽¹⁾なのである。しかも言語を生み出す脳髄は初期人類の感覚器官の発達、神経系の発達により徐々に発達していき、意識を生み出すまでに成長していった。すなわち言語は意識を得て、現実的なものとなっていったのである。

初期人類の感覚器官のうちまず知覚は、動く動物や魚類を捕獲する運動過程のなかでその感覚が鋭くなっていった。眼球は発達しより遠く、よりはっきりと知覚でき、動く物体を的確にとらえていけるようになった。一方眼球の発達は、初期人類を暗がりでもものが見えるように

し、また明るさにも慣れさせていったのである。

次に聴覚である。動物が発する鳴き声を聞き分け、その所在を確かめることができるに従い、小さな音でも聞き分けれるように聴覚が発達していった。触覚も然りである。道具で木を切ったり、鎗のようなものを投げて動物を倒したり、魚を獲ったりすることで触覚も発達していった。

人間の感覚器官の発達と同時に、人間の神経系の発達を促し、全身にくまなく張り巡らされた神経系組織は徐々に高度化していった。眼球がとらえた物体の動きは、瞬時に知覚神経網の働きにより脳髄に到達する。この外界刺激と神経系との相互連環の繰り返しは、徐々に感覚器官を鍛え、神経網を高度整備し、脳髄を活性化していった。

活性化した脳髄は、一定の概念を形成していくことができ、その概念を言いあらわすものとして言語を生み出した。最初は「ア」とか「イ」とかいう単に音節のみであったが、すぐに名詞を言いあらわしたり、動態を言いあらわし、形容を言いあらわし一定の概念を言いあらわすことができるようになった。このようにして言語は発生していった。この意味でまさに「言語とは、実践的な意識、他の人間にとっても存在し、従ってまた私自身にとってもはじめて存在する現実的な意識」⁽²⁾なのである。

つまり言語は意識と同じように、他の人間とのコミュニケーションの欲望、その他の必要からはじめて発生するのである。まさに言語は実践的な意識であり、脳髄において形成された人間の概念（これは人間の蛋白体物質の働きによる精神的な産物）が信号化され、この「物質が運動する空気層すなわち音響の、つまり言語の形」⁽³⁾となってあらわれるのである。

3. 言語と意識の弁証法的関係

上述したように、人間の意識の働きによって生み出された言語は、自然界、人間世界とのコミュニケーションを求めて意識が実践化された形で表象される。そして自然界、人間世界と人間とを結ぶ言語によって、特に人間関係を言語活動によって変化・深化させていくことにより、人間意識に再び言語が戻り、人間意識をより明確化させ、人間の概念形成作用を一層促進させるのである。

言語活動が豊富になり、言語生活が他の人間との関係のなかで豊かになるに従い、人間の意識がより社会的諸関係を洞察できるようになり、概念形成がより複雑になり高度化していくのである。この高度化の過程を経ることにより、人間は思考を深め、絵画や音楽、哲学的思考、学術的研鑽の道を歩んでいくようになったのである。

すなわち意識ははじめから社会的な意識なのであり、それに従って言語もまた社会的産物であり、脳髄によって物質的に生産されたものであり、意識という精神的なものの働きが現実化したものである。なぜなら外界事物の刺激を受け取った人間の感覚器官を通しての信号は脳髄に伝達され、脳髄はその電気信号刺激を分析・総合し、一つの意識を形成する。意識は次に概念化され、一つの体系だった概念を形成する。この過程を人間の思考過程と名付けることができるからなのである。従って思考は、人間の脳髄という極めて物質的なものの働きによる産物である。言語もまたその思考過程の物質概念体现形態の一環として外界にたいして表象されるのである。

もちろん人間の意識作用は人間の精神作用の範疇に入るが、意識活動を生み出すもとは外界事物刺激であり、脳髄の蛋白体他による物質的な機作機能なのである。すなわち意識が外界世界を規定するのではなく、外界世界が意識を規定するのである。そしてその人間の生きた意識は再び外界事物に戻り、外界事物に働きかけて外界事物を変化・改善していくのである。

次に意識が発生する根拠は、脳髄の蛋白質を中心とする脳内物質の働きによる。しかしながら意識そのものは物質から発生するが、物質の働きにより精神の作用として具現化され物質ではなく、精神の働きとして新たな展開段階を迎えるのである。この過程が人間にあっては生命活動と呼ばれるものであって「生命とは蛋白体自身の存在の仕方であり、この存在の仕方は、本質的には、蛋白体の化学成分が不断に自己更新を行うことにある」¹⁴⁾からなのである。

では何故意識が生まれたのか？

この問題はまた本能的な欲望のままに生活する動物と違って、初期人類がいかにサルと違って人間としての道を進化していったのかという疑問に答えることでもある。動物的なサルと人間との決定的な違いは、意識の形成である。意識を形成し、意識をより高度化させて概念を形成し、思考段階にまで高めることにより人間はサルとは違った進化の道を歩むようになったのである。すなわち思考により、道具を作り、言語を発明していきますますサルとの生活と意識の差を作ったのである。

ではその意識はどのような環境から形作られていったのであろうか？

その前に、ではサルとあまり変わらない生活条件は何かを考えてみよう。まず社会的、集団的生活状況である。これはサルと初期人類にあってはあまり変わらないものと推察される。サルもいわば集団生活を営んでいた。第二に、生存要求である。これもサルと初期人類とはあまり違わない。サルも餌を求め、初期人類も餌を求め、森林や平野を採集・狩猟した。そして決定的に違うことは、初期人類にあっては協働労働のなかから、共同生活のなかみをサルよりも少しずつ、少しずつ向上させていったということではないのか。すなわち初期人類が自然界に働きかけ、自然界をより人間に近いものへと変化させていった協働労働の過程が決定的にサルと人間とを区別していった原因なのである。

なぜなら協働労働の結果により初期人類は道具を考案し、ますますサルとの生活のレベルの違いを際立たせていったからなのである。道具を考案することにより、人類は種の保存に必要な食糧をより確実に手に入れることができるようになった。すなわち、野生動物にたいして木を削った鎗のようなものを作り、それを投げたり、刺したりして飛躍的に獲得獲物を増大させていった。また火を熾すことを覚え、肉を調理することにより、より食生活がバラエティに富んだものへとなっていった。

またこの進化の過程のなかから、意識の実践的な形態としての言語が発明されていった。それは発明というよりもむしろ必然的に意識的な協働労働のなかから生み出されていったものなのである。

すなわち初期人類は、自然界および人間関係にたいする働きかけ、つまり日々の協働労働の必要性のなかから道具を作り、言語を作り出し、今度はより一層対自然界、対人間社会に意欲的・積極的に働きかけていくことによりまた一層発展の段階を登ることにより、サルとの違いを決定的にしていったのである。

4. 意識と感覚器官のはたらき

言語がいまの社会生活で占める役割は大きなものがある。音声言語によりわれわれは他の人とコミュニケーションをとり、自分の意思を相手に伝えることができる。また文字言語によっても相手に自分の考えを伝えることができる。このように言語活動は人間の社会活動の必要不可欠な位置を占めているのである。

だが戒心しなければならないのは、では言語がすべてであり、人間は言語の働きを精緻にしていけば、整えていけば必然的に真理に到達できるかという決してそうではない。もちろん言語を人間が駆使して真理に到達しようとする。だがあくまでも言語は手段なのである。そしてその言語が手段だということは、真理探究の際に最も重要となることはなにかということである。

人間は日々の生活を行うことにより真理を発見しようと努めている。その真理発見に至る道は、日々の生活のなかから必ずしも発現しているわけではないところの自然界の法則性に結実する自然界の原理および、人間社会が解決しようとする現実問題のなかにある矛盾を見出す道なのである。

そして人間はこの真理到達への道を自然界と人間社会への働きかけ、すなわち協働労働のなかから見い出していくのである。なぜなら人は古来から労働により社会の生産力を確保し、社会集団生活を維持向上させてきたからなのである。労働なくしては人間社会のこんにちに至るまでの進歩はなかったし、労働がなければ原初に遡ればサルから進化することもなかったのである。

ということは人間は協働労働の過程により、人間自身を成長・変化させてきたのである。すなわち労働の道具を考案することにより、より活動の場を広げ、そのことにより脳髓の働きを新たな刺激を受けることにより強化してきたからに他ならないからなのである。この過程のなかで言語が発明されたのでもあるし、また人間の感覚器官もまた一層その働きを強化してきたのである。すなわち視覚、聴覚、触覚、嗅覚の働きは外界刺激信号をより正確に脳髓に伝えることができるようになっていった。まさに「感覚は現実意識と外界との直接的連結であり、外界刺激のエネルギーの意識の事実への転化」¹⁵¹なのである。

だがあくまでも言語や感覚器官は、人間が真理に到達するための手段であって、たとえば感覚器官の働きを強調することにより人間の思考能力が感覚器官の働きにあるとする考えはあたらないのである。まして言語の働きのみを強調して、あたかも言語を駆使することによりものが解決するように考えることは間違っているのである。

言語主義者は言語活動が人間の思考を昇華した純粋なものとするばかりに、その言語活動によりものごとの推移をはかることができると誤解してしまうのである。言語活動は人間思考活動の反映なのであり、さらに人間思考活動の基底は変転してやまぬこの世の中の動きそのものであり、人間はその外界刺激を人間の脳髓が消化吸収して、より建設的より洞察的なものへと創造過程を行い、その思考結果として精神作用としての意識を生み出し、その意識が言語として表象されるのである。この連環の環を理解しない言語主義者はひたすら人間言語の魅力と意識の存在を強調し、人間の感覚器官の働きを強調してその陰に隠れてしまうのである。

このような問題を解決するには、言語が発生したもとである人間の意識、そしてその意識の

発生源に遡る必要があるのである。人間の意識は、どこから発生するのか？ それは前に何度も触れたように、人間の感覚器官をとおして自然界や人間社会の刺激が脳髄に伝えられ、脳髄はその物質的働きの頂点としての意識という精神的なものを生み出し、意識は同時に、たぶん同時に言語を生み出したことを考えれば明白である。そしてなによりも人間社会の成り立ちの淵源は、協働労働のなかにあるということである。ここに言語と意識との発生のみなもとを探さなければならないのである。人間は協働労働という極めて社会的な行いのなかからサルとの違いをはっきりさせて、日々の労働の成果を得ることにより種族を維持し、個体を維持してきたのである。

そして協働労働のなかみは、なによりも人間が社会的動物であるということである。この社会的なもののなかに言語活動の原点を解く鍵があるのである。すなわち、人間は社会的な関係のなかでコミュニケーションの手段として言語を発明していったのであり、言語はあくまでも人間の拠って立つ社会的基盤を言いあらわしているに過ぎないのである。つまり言語が先なのではなく「最初にことばありき」ではなく、最初に人間という社会的動物ありきなのである。

このことはまたでは、人間の言語活動の改善の原点をどこに求めたらよいかという問いの答えともなる。言語活動の改善は、言語そのものに求めるのではなく、言語が発生した基盤である人間の協働労働の改善のなかにこそ求めるべきだということの結論の間近かまでわれわれを導いてくれるのである。では次の問題として、人間の協働労働の改善とは一体何なのかということになる。協働労働の改善とは、いつに労働の観点を社会性に置くということに尽きるのである。なぜなら人間はそれほど社会的な動物であり、その社会性を追及すればするほど、その社会性を極めるには十分なほどの身体機能と脳髄機能とを兼ね備えているからなのである。この人間の身体機能と精神作用を生み出す脳髄機能とは、この世の真理を多くは協働労働の成果によってすべてを汲み取ることは出来ないにしても、しかしそれはこの世の真理に近づく、接近していくには充分過ぎるほど充分なほどに出来ているからなのである。

5. ヴィトゲンシュタインの「論理絵」概念

分析哲学者ヴィトゲンシュタインは、日常言語の記述的分析的手法を用い、哲学の仕事を言語批判や命題の意味を明らかにすることを行った。かれはまず世界を事実と事物とに分け「世界は、事実 (Tatsache) の総体であって、事物 (Ding) の総体ではない」^[6]とする。まずここにかれの分析哲学がみずから引いた限界が明言されているのである。すなわち眼に見え、論理的に記述できるところの事実と、実在世界の事物——これは現実世界のすべてであり、人間は自然界「事物」の全体像に接近すべく文字通り「事実」を積み重ねていっている連関を見ないのである。従って事実と事物とを峻別することは、事実の積み重ね、発展の過程を経て実在世界の事物に迫っていくという事実と事物との弁証法的な関係を最初から見えていないのであり、「世界は、事実の総体であり、事物の総体ではない」ということになってしまうのである。世界は外界事物の総体——全部を人間は把握、認識しきれないが——であり、論理的に明証される事実の総体性を持たせてしまうことは、外界事物の実在性と、その外界事物を構成する事実の環という関係を見失ってしまうことになるのである。

だからここは言うとするれば、世界は事物から成り、それは事実の総体、総和から成り、われ

われは事物の総和には、事実を発見しながら一步、一步近づいていき、外界事物の全体像に接近していくのである、とすべきなのである。

このことはヴィトゲンシュタインによればさらに「成立する事態 (Sachverhalt) の総体が、世界である」(2・04)。「現実の総体が世界である」(2・063)となるのである。ここにおいてもヴィトゲンシュタインは論理的命題の整合性を重んずるあまり、言語論理的に成立するすなわち矛盾なく記述できる事態や現実の総体を世界としてしまうのである。これはまたヒュームの「われわれの知覚が真なのか偽なのか、つまり、知覚が正しく自然を表現しているのか、それとも感覚機能の錯覚なのか、ということについては、知覚の整合性から推論を導きだせる」⁽⁷⁾という世界に逆戻りである。

しかしながら世界は客観的に外界に存在する「事物」の「総体」なのであって、これと事実とを敢えて区別して、事物が世界の根本であることを曖昧にしてはならないのである。しかも「現実の総体が世界である」として一步外界事物の客観性を認める立場に近づきながら何故「事態の成立と非成立とがすなわち現実である」(2・06)というように、事態の成立、非成立という事態を記述する要素命題 (Elementarsatz) に生きた現実をそのまま分解してしまうのか？ これは言語分析派の立場からすれば、明晰判明に言いあらわせるものがすべてであり、それが「事実」であるとみずからよろい戸を設定してしまっているのである。

これは逆の表現ではヴィトゲンシュタインによれば「世界とはその場に起こること (was der Fall ist) のすべてである」(1)となる。生起する事実がすべてとするのであるが、これは逆の意味でヒュームやカントが陥った不可知論に導かれるのである。すなわちこの世に生起していないと命題化されることは感知しなく、感知する必要がなく、人間の意識から独立する客観的実在については、なにひとつ確実なことは知り得ないとする不可知論に必然的に導かれるのである。ただしヴィトゲンシュタインは言語分析の明晰性に重点を置き、事実言語による整合性を把持するものであるとして、言語分析の手法を撰取したことは高く評価されなければならない。

またヴィトゲンシュタインは「論理的空間 (logische Raum) のなかにある事実が、すなわち世界である」(1・13)と言い、命題的に記述され得る限りのすべての事実から成る論理的空間、つまり事実の成立と非成立の場がここでは設定され、またもや外界事物の存在が論理空間の「要素」に分解され、論理的命題の範疇のなかでの事実の成立と非成立という命題相互間の論理的関係のなかに押し込められてしまっているのである。

さらにヴィトゲンシュタインは言語のなかの規則性・文法法則に着目し、ものごとの本質理解を探る際に言語の中の規則・文法として含まれていると主張する。かれの学説はジョン・ロックの言語役割論批判から始まるのである。ロックによれば、言語の役割は「記録と伝達」に限られるとする。われわれが一度考えたことを、忘れないように「記録」し、また自分が考えたことを他人に「伝達」することが、言語の役割と考えたのである。つまりロックにとっては、思考とは「こころのなかの観念」操作であり、こころのなかで観念によって作られる「こころの命題」こそが本当の「考え」であって、それに「記録と伝達」のために外面的な表現を与えたものが「ことばの命題」、すなわち言語表現に他ならないとするのである。⁽⁸⁾これはあくまでも人間思考の源泉を人間のこころの働きの中にもみる考えであり、外界事物はそのこころの働きによって見えてくる「範囲」のものという解釈を生み出してしまうことになるのである。ここ

ろのなかの観念の「生得性」のもととなる外界事物の实在性を見ない余り、外界事物からの人間の感覚器官をとおしての人間の脳髓の働きとしての観念構成のプロセスをみようとしないのである。

これにたいしてヴィトゲンシュタインは、ロックを批判しながら同じ立場に立つことになるのである。すなわち言語分析を徹底化することにより言語が表象するところのところの働きを明らかにすることができ、そのことにより概念と事物とを峻別し、哲学的探究とは言語規則にかかわる概念的探究をなすことであり、それと事物とは峻別されるべきとするのである。この論点からは、まず第一に概念と事物との混同を避けたいあまり事物と概念との連環関係に眼を閉じてしまうのである。哲学的分析がなすべき第一の課題は人間概念と事物との関聯を明らかにし、第一義的に事物があるのか、それとも概念があるのかという問題を明確に解決することが求められているのである。この問題を解決しなければいくら精緻に言語分析を行っても「ものごとの本質」には迫り得ないし、「ものごとの本質」に迫るための道筋を示し得ないのである。

実際のところ、言語分析を行う際にまず生ずる整合性が得られない場合に言語分析派は、われわれはなにかの間違をおかしていると考える。そしてその不整合性の原因が「事実についての判断」の誤りなのか、それとも端的に「ことばの使用」についての誤りなのかについては立ち入ってはいないのである。否、事物と意味としての言語の問題は峻別すべきとしてみずからの手を縛ってしまっているのである。これは何に起因するのか。それはいつに「言語の成立基盤を事実としてのわれわれの一致にある」とする考えにあるのである。「この机が丸い」とわれわれが一致して「丸い」と言えば、認識すればその机は丸いのであり、いやその机は丸くないのだという意見が出た場合には、それは整合性の缺いたものとなり意味がないものだとして避けられるのである。これは確かに言語を他のものとの関聯においてとらえ、他との関聯のなかで経験的に「その机は丸い」とわれわれが一致した時に整合性を持つのだとすることは意味がある。しかしながら、では事物との関聯はどうなるのか？ 峻別されるのか。純粋な「丸い」という概念を「事物」という汚染から切り離すことにより、言語分析を徹頭徹尾行うことでもものごとの本質は把握されるのであろうか？ 重要なのは机が丸いか、四角いかというわれわれの側の意識ではなく、第一義的に事物が、机という事物物質が外界に在り、人間の感覚器官がそれを視覚によってとらえ、人間の意識作用が脳髓の働きにより生じて、概念を発生させ、丸いとか四角いとかいう概念を発生させるという過程を踏むのである。従ってそこでは「われわれの一致」ではなく、外界事物である机の存在がもとなのであり、人間の感覚はその外界事物にたいして文字とお丸いとか四角いとかいう言わば記号化した概念、その表象形態としての言語を生み出すということなのである。ここにおいて事物と意識との峻別理論は逆の意味で観念論化してしまい、外界事物の第一義性と観念の第二義性を「峻別」できなくなるのである。すなわち、物質がわれわれの感覚器官に作用して感覚を生み出すのである。物質の存在は感覚に依存していないのであり、人間の「丸いという感覚のわれわれの一致」にもものごとの本質があるのではなく、「物質が第一義的なもの」⁽⁹⁾であり、「われわれの感覚、思想、意識は特殊な仕方で組織された物質の最高の所産」⁽¹⁰⁾であるという観点にもものごとの本質があるのである。

6. 言語と実在世界

ヴィトゲンシュタインが言うように「現実の総体が世界である」と外界事物の実在性に一歩も二歩も近づきながら、接近しながらなぜ「事実の絵 (Bild)」(2・1) を書かなければならないのか？ みずから論理的命題の整合性という枠組みを設定してはならないのである。「絵とは、論理的空間のなかにある状況を、すなわち、さまざまな事態 (Sachverhalt) の成立と非成立とを表す」(2・11) となり、論理的空間または、論理的命題の整合性を強調し、再び「現実」に敷居を設け、「現実」から遠ざかろうとする。何故なのか？

それは「絵は現実のモデルである」(2・12) という論理を追及しなく「描かれた諸対象には、絵のなかで、絵の要素がそれぞれ対応している」(2・13) という状況を逆に追及しているのである。それはひとえに絵は現実の「忠実な」模写なのであり、その絵は外界事物の刺激を感覚器官によって信号化され、脳髄がそれを消化吸収するのであり、外界事物の実在性に基づく反映論を理解しないからなのである。

第一義的なものは事物であり、「絵」(Bild) はその事物の「モデル」すなわち「模写」なのであって、この反映論にヴィトゲンシュタインはあと一歩なのである。それなのになぜ「論理絵」を導き出し、「論理的形式」を持ち出すのか？ そしてこの論理的命題は、当然にさまざまな要素の配置、すなわち構造を持つとする。ここで要素を持ち出し「絵を絵たらしめているものはその要素が特定の仕方ですなわち互いにかかわり」(2・14) 合っているということは、絵とそこに描かれたものの構造的対応可能性の問題とされる。そして構造的対応可能性を論ずる際には、さらにこの対応可能性理論を押し進める必要がある。すなわちそれは「対応」ではなく、外界事物を感覚器官が知覚し、脳髄に伝え、模写がなされ、脳髄がその信号を消化吸収し、産みだされた意識や思考が再び外界事物に戻り、外界事物に働きかけていくという「構造」が重要なのである。

しかも事物を「要素」命題に還元する手法はかつてのマッハ主義への逆戻りである。

マッハ主義者にとっては、世界とはわれわれの感覚のことであるとする。すなわちわれわれの感覚によってとらえられるものが世界を構成する要素であり、その他には実在的なものはなく、たしかなのは、われわれの感覚でとらえられる世界であると主張するのである。これはジョン・ロックの言う「私たちの持つ観念の大部分の大きな源泉はまったく感覚 [感覚器官] に依存し、感覚によって知性へもたらされるので、私たちはこの源泉を感覚と呼ぶ」¹¹⁾の世界に逆戻りである。この立場もまた、感覚というものを取り出して事物の実在性を覆い隠そうとしているのである。もちろんわれわれは、感覚の働きなしには外界事物をとらえることはできない。これは事実であるが、われわれの感覚器官の働きは、外界事物を正確に模写 (Abschrift) ・撮影 (Aufnahme) ・反映 (Widerspiegelung) できる能力があり、われわれはその模写された外界事物をわれわれの脳髄で消化吸収してそこから意識や思考を生み出し、再び外界事物を変化させるべく思考や意識を巡らすという関係を理解しなければならないのである。

マッハ主義者の世界要素の発見とは次のようなことである。

E・マッハによれば「感覚ないしは現象と物との対立は脱落して、問題なのは、要素 $\alpha \beta \gamma$ …… A B C …… K L M …… の関連だけになる」¹²⁾ となってしまうのである。外界実在の物と感覚ないし現象との相互関係を文字通り「脱落」させ、物体や自我が存在するこの全世界を要素

の聯関だけに収斂させてしまうのである。

しかもマッハは、この要素を感覚だとし、諸要素すなわち感覚が第一次的なものとする。つまり私が「緑」と感覚するのは、諸要素が他の諸要素である感覚・記憶の或る複合体のうちに現れることだとする。すなわちマッハにあっては、あくまでもこの世のなかにある実在的なものは、「緑」と感ずる「私」の「感覚」であり、その感覚はまた世界を構成する要素（世界要素）であるとする。こうして「知覚も意志も、感情も、内外世界の全体は、ある時には流動的に結合し、ある時には鞏固に結合している少数の要素から成り立っている」¹³ となってしまうのである。この主張は、要素を主観・客観の区別のない中性的なものともみることにより、観念論、唯物論を克服したとするが、見ての通り実在を感覚に求める限り、人間感覚に映し出される客観的外界事物の存在を否定する立場に陥ってしまっているのである。

マッハは「物体が感覚を産出するのではなく、要素複合体（感覚複合体）が物体を形づくる」。『物体はすべて要素複合体（感覚複合体）に対する思想上の記号（Gedanken-symbol）にすぎない』¹⁴ とし、物体を思想上の記号としてしまっているのである。

このことは言語論にも重要な示唆を与える。言語を要素だとして、外的世界をかたる要素としての言語機能を強調し、言語は思想上の記号だとする誤った理論に導かれる。しかし既に何度も述べたように言語は外界事物・物体、人間関係が一旦人間の脳髄に消化吸収され、意識が発生し、意識の**現実型**が言語であり、あくまでも第一義的なものは外的な実在であるという点が重要なのである。しかもさらに第二義的意義を持つ言語が今度は第一義的外的世界に働きかけて、外的世界を変革していくポテンシャルを有しているという観点を忘れてはならないのである。

ヴァイトゲンシュタインは「人間知り得ぬものについては語り得ない」（6・7）とする。確かに一面の真理ではある。これは「真理へのわれわれの知識の接近の限界（Grenzen der Annäherung unserer Kenntnisse）が歴史的に条件づけられている」¹⁵ という意義へあと一歩である。人間の認識には限界があり、人間の知覚能力には限界があり、人間の意識や言語活動にも限界があり、人間の脳髄の働きにもおのずと限界がある。だが人間は真理に接近できるのである。なぜなら人間は人智の限界を認識できるし、また人間叡智は実在する真理接近への努力によって真理に永遠に接近していけるほどには充分であることも知っているからなのである。

7. 言語の本質（「結び」に代えて）

言語の本質を再び考えてみよう。言語は大別すると音声言語と文字言語とに区分できるが、音声による言語使用について特にみてみたい。言語は現代社会において缺かすことのできない人間相互のコミュニケーションの手段である。またその人間の思考を相手に伝えるものである。そしていままで幾度も述べてきたが、その思考のものは人間の脳髄において行われる物質代謝過程にある。すなわち、人間は外界世界である自然界、人間世界からの刺激を感覚器官が受け取り、脳髄に外界刺激信号として一種の電気信号の形で伝達するのである。その際、外界の刺激の質的強弱、量的な量や繰り返しの頻度等々によって計量できる刺激の質的・量的違いを読み取り、電気信号化して脳髄に送るのである。この際、常日頃人間の意識が関心を持っている外的刺激にたいしてはたとえば視覚神経もいわば研ぎ澄まされて鋭くなり、いわば「眼を凝らす」というように視覚神経の働きが意識の働きかけにより物質的に鋭くなるのである。

感覚器官によって受け取られた外界刺激は感覚器官によって電気信号化され脳髄に伝達される。脳髄はその信号を、今度は読み取り、信号を分析し、総合的に構成し、瞬時に判断を下し、人間の各組織に命令を送るのである。たとえば手を動かすとか、走るとか。しかしこのような身体的な行動指令は基礎的な部分である。人間が人間たるゆえんは脳髄の物質的な働きが精神作用として結集され、それが意識、概念形成、思考といった精神作用を形成するところにあるのである。そして言語は、この人間の精神的作用の産物である意識形成に伴って、その現実的な形として形作られるのである。すなわち言語は、人間の意識が具体化したものなのである。そして意識は人間が自然界や人間世界に働きかけていき、より人間的に生きるという本能的要求を充たすための人間の行動の原動力となるのである。

すなわち精神作用の産物である意識の形成があってはじめて、人間は再びこの外界世界、人間世界に主体的に働きかけていくことができるのである。従って言語は、外界世界にたいする、人間世界にたいする人間としての働きかけの重要なファクターなのである。それは手を動かすこと、足を動かすことと基本的には出発点は変わらないが、脳髄においてより高度化され精緻化された人間の精神活動の精華なのである。従って言語はまず、人間が生きる現実世界の外的刺激が基礎にあり、その刺激を人間の脳髄が消化吸収し、みずから練り上げ、脳髄にある過去の経験の蓄積領野、創造的領野の働きを総合化、活性化して作り出した人間の精神作用の精華なのである。

人間のこころが行う仕事は、客観的世界の認識もそうであるが、感覚器官で受け取られ符号化された情報を処理することからすべて生ずる。感覚器官によって受容された外界情報は中枢神経系のさまざまなレベルが協力するなかで、加工・処理された情報は最後には大脳皮質に到達する。すなわち「意識諸過程は、大脳皮質全体が皮質下の部分系と共同して果たす総合的な仕事」⁶⁶⁾なのである。このように形成された意識から発生する概念および思考に基づき人間の外的な行動が発現する。すなわちそれは手の動き、骨格筋肉の動き、そして言語となって発現するのである。

すなわち言語は、人間の意識、これが最高度に結晶したのが思想なのであるが、その「思想の直接的現実性が言語」⁶⁷⁾なのである。

そして思想の直接的現実性である言語は、なによりもこの自然界、人間世界の真理を言いあらわすために、また外界事物の実在性が持つ本質に迫るために用いられるのである。すなわち人間は言語を用いることにより、ものごとの本質に迫り、再びその本質を言語活動で逆照射することにより、人間にとってものごとの本質をより明らかにすることができるようになるのである。すなわちたとえば日常、話しているうちにだんだんわかってくるという事態をわれわれは経験することがある。これは言語が用いられたときに真実を言いあらわしているのである。すなわち、われわれは思考の現実性として言語を用い、その言語を用いるときに、すなわち話しているうちにだんだんにいままで不明瞭だったことが明瞭になってくることを経験する。つまり言語によってものごとの本質に迫りつつあるのである。そしてさらに重要なことは、その意識から生み出された言語が今度は現実世界に働きかけて、その現実世界を変化させていくという観点である。言語は外界刺激によって形成される意識によって生み出され、その言語が現実世界に戻ることににより、今度はその発生基盤である現実世界を変化させていくことができるのである。ここにこそ言語と人間世界との相互浸透の連環性が存在するのである。

註

- (1) J.G.ヘルダー著、大阪大学ドイツ近代文学研究会訳『言語起源論』、法政大学出版局、1972年、37ページ。
- (2) Karl Marx, Friedrich Engels: Die Deutsche Ideologie, Marx-Engels Gesamtausgabe, Bd.3, Dietz Verlag, Berlin, 1969, S.30. 邦訳：マルクス・エンゲルス著、古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』、岩波書店、1956年、37～38ページ。
- (3) Karl Marx, Friedrich Engels: Die Deutsche Ideologie, Marx-Engels Gesamtausgabe, Bd.3, Dietz Verlag, Berlin, 1969, S.30. 邦訳：マルクス・エンゲルス著、古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』、岩波書店、1956年、37ページ。
- (4) Karl Marx, Friedrich Engels: Anti-Dühring Dialektik der Natur, Marx-Engels Gesamtausgabe, Bd.20, Dietz Verlag, Berlin, 1975, S.75. 邦訳：エンゲルス著、村田陽一訳『反デューリング論』、大月書店、1955年、124ページ。
- (5) V.I.Lenin, Lenin Werke, Bd.17, Dietz Verlag, Berlin, 1977, S.42～43. 邦訳：レーニン著、寺沢恒信訳『唯物論と経験批判論』、大月書店、1953年、52ページ。
- (6) L. ヴイトゲンシュタイン著、山元一郎訳『論理哲学論』、中央公論社、1971年、329ページ。なお以下に「」で引用する同書の該当箇所のあとに（）を用い『論理哲学論』でヴィトゲンシュタインによって個々の命題番号として使用された十進法の数字を示す。
- (7) D.Hume, A Treatise of Human Nature, 2nd ed., Oxford University Press, Oxford, 1978, p.84. 邦訳：ヒューム著、土岐邦夫訳『人性論』、中央公論社、1968年、435ページ。
- (8) 丹治信春著『言語と認識のダイナミズム——ヴィトゲンシュタインからクワインへ——』、勁草書房、1996年、1～2ページの記述を参考にした。
- (9) V.I.Lenin, Lenin Werke, Bd.17, Dietz Verlag, Berlin, 1977, S.37. 邦訳：レーニン著、寺沢恒信訳『唯物論と経験批判論』、大月書店、1953年、44ページ。
- (10) V.I.Lenin, Lenin Werke, Bd.17, Dietz Verlag, Berlin, 1977, S.47. 邦訳：レーニン著、寺沢恒信訳『唯物論と経験批判論』、大月書店、1953年、57ページ。
- (11) ジョン・ロック著、大槻春彦訳『人間知性論』、中央公論社、1968年、81ページ。
- (12) E・マッハ著、須藤吉之助、廣松渉訳『感覚の分析』、法政大学出版会、1971年、13ページ。
- (13) E・マッハ著、須藤吉之助、廣松渉訳『感覚の分析』、法政大学出版会、1971年、18ページ。
- (14) E・マッハ著、須藤吉之助、廣松渉訳『感覚の分析』、法政大学出版会、1971年、23ページ。
- (15) V.I.Lenin, Lenin Werke, Bd.17, Dietz Verlag, Berlin, 1977, S.132. 邦訳：レーニン著、寺沢恒信訳『唯物論と経験批判論』、大月書店、1953年、173ページ。
- (16) A. コージング著、秋間実訳『マルクス主義哲学』下、大月書店、1970年、767ページ。
- (17) Karl Marx, Friedrich Engels: Die Deutsche Ideologie, Marx-Engels Gesamtausgabe, Bd.3, Dietz Verlag, Berlin, 1969, S.432. 邦訳：マルクス・エンゲルス著、古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』、岩波書店、1956年、226ページ。

参考文献（配列は発行年順で、註での引用文献は除く）

1. 高名凱、石安石編『言語学概論』、中華書局、1963年。
2. 尾関周二著『科学全書9 言語と人間』、大月書店、1983年。
3. 尾関周二著『言語的コミュニケーションと労働の弁証法——現代社会と人間の理解のために——』、大月書店、1989年。
4. A.J. エア著、篠原久訳『ヒューム』、日本経済評論社、1994年。